平成最後の亥年にまつわる資料から

天理参考館学芸員
幡鎌　真理　*Mari Hatakama*

昨年の同じ時期、戌年に因んでイヌにまつわる小稿をここに掲載していただいた。あれから１年……当然ながら今年は亥年。奇しくも「平成」最後の年が干支の掉尾を飾る。

干支の順番を決める故事の一説によれば、イノシシは“我こそは”と猪突猛進そのままに、急ぐあまりゴールを遙か行き過ぎて、急いで戻ってきたが最後になってしまったとか。なんとも可哀想。ネズミが善良なウシの頭に乗って労せずたどり着き、ゴール直前に飛び降りて一番になったのと対照的だ。「いの一番」という言い回しは「いろは」の最初という意味もさることながら、激走した「亥」を斟酌してのことかもしれない。

その疾駆とは真逆に、途中でごちそうを食べた挙げ句に昼寝をして、ようやく最終枠に滑り込んだという別の故事もある。その故事は中国由来で、天帝は鳴き声で到着に気付いたらしい。鳴き声とは？　そう、その動物はブタだったのです。実は干支にイノシシが加わっているのは日本だけで、中国も韓国も東アジア諸地域では今年はブタ年。漢字で“猪”と書くと、中国では「家猪」つまり「豚」を意味する。イノシシは“野猪”と表記しなければならない。なるほど『西遊記』に登場する「猪八戒」は豚だ。表現も「猪口才」な小僧、ずんぐりした「猪首」、「猪突猛進」の無鉄砲さ、等々あまり良い意味は見つけられない。なんとも可哀想。

図１　猪乗り金太郎　宮城　昭和 45 年　高 19.0cm

日本の郷土玩具でもウシ、トラ、ウサギ、ウマ、イヌは全国各地それぞれに特色があり目を楽しませてくれるのだが、タツは想像上の動物ゆえ別格として、ヒツジとイノシシは分が悪い。ヒツジはおそらく身近な動物でなかった所以だろうが、イノシシは害獣だったからか。私にはいまだ解明できていない。そして玩具にも関わらず、おしなべて顔がコワい。**図１**をご覧いただきたい。昨年の本誌２月号もご参照いただければ、戌の玩具のモチーフの豊かさ、愛らしさをわかっていただけると思う。なにせトラが生息しない日本では、クマとイノシシが二大猛獣として恐れられた。この獣たちに共通してしばしば登場する人物とは誰でしょう？　そう、金太郎です。馬上の金太郎は稀で、郷土玩具ではほぼお目にかかれない。まずはクマ、次いでイノシシとペアを組むことがほとんどだ。金太郎は現代の CM では「日本を代表する三人の太郎」のうち、お調子者のイメージだが、異説あるものの、平安時代中期に実在した武者、坂田金時（公時）とされている。武勇を認められて源頼光に仕え、55 歳でなお九州制圧の命を受け、赴く途中に美作国（みまさかのくに）で病を得て亡くなったとされ、その地に祠が残る。さらに、頼光と時代を同じくする藤原道長の『御堂関白記』寛仁元年（1017）八月二十四日条に“帥（太宰府長官）のもとより書を送らる。書を開き見るに曰く、相撲使公時死去の由なり。件の男は随身なり。ただいま両府（左近衛府・右近衛府）の者の中、第一の者なり。日来かく云々により、憐れむ者多し”（下線筆者）と、公時の名前が挙がる。随身（ずいじん）は、雛飾りで胡簶（やなぐい）を背に負った袍（ほう）姿の老人と若者を思い浮かべていただきたい。要するに貴人警備の官人、近衛兵を指す。腕が立つのはもちろん、教養と美貌も兼ね備えていなければならない。道長の直接の家来ではなかったが日記に留め、自身も「第一の者」と認め、その死を「憐れむ者多」い実在の人物だった。それに比べれば、桃太郎も浦島太郎も所詮はお伽噺（とぎばなし）の主人公にすぎない。**図１**は宮城県仙台市の堤人形「猪（い）乗り金太郎」。金太郎は全身真っ赤に塗られている。赤色と疱瘡除けの関連や堤人形の詳細については参考館 HP の『参考館セレクション』をご参照いただきたい。私には咄嗟にできる自信はないのだが、イノシシに出会ったらまっすぐ走って突然曲がるといいらしい。どうもコーナー走が苦手なようだ。そんな疾走するイノシシの上に、あまつさえ武器を持って屹立するのが摩利支天である。太陽の前を駆ける陽炎の化身である摩利支天の動きは速くてとても見えないとされるため、イノシシに乗る。摩利支天は古来その勇ましさから武士の信仰が篤く、武田信玄の軍師山本勘助が尊崇したことでも有名だ。最高時速 50km を誇るイノシシに鉞（まさかり）をかついで摩利支天さながらに乗りこなす金太郎の姿は爽快だ。

図２　畳糸紋縁製造并二縁布卸販売・商号絲常森田商店引札
京都　明治後期　25.5×37.6cm

もう一つ、クマと相撲ならぬ、イノシシと首引き相撲をする絵柄の引札がある**図２**。引札とは商店のチラシで、新年に得意先に配布することから招福の絵柄が多い。暦が入るものもあり、現代のカレンダーに通じる。これが刷られた年は不明だが、色使いから明治後期と推定できる。表記された住所の「京都市」が成立したのは明治 22 年なので、それ以降の亥年である明治 32 年か 44 年のいずれかと考えられる。

イノシシは鼻が敏感で意外にも警戒心が強く、「盲信」や「盲進」をしない動物だ。新しい時代を迎える今年、もしかしたら「猪突猛進」も必要な局面かもしれない。

〈図は全て天理参考館蔵品〉